Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | イディオムの定義とその言語文化的考察 |
| Author(s) | 鈴木, 雅子 |
| Citation | 大阪大学, 2007, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/58807 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 鈴木　雅子 |
| 本籍（国籍） | |
| 学位の種類 | 博士（言語文化学） |
| 学位記番号 | 甲 第　８２　号 |
| 学位授与年月日 | 平成１９年３月２３日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第４条第１項該当　課程博士 |
| 研究科及び専攻 | 言語社会研究科言語社会専攻 |
| 学位論文題目 | イディオムの定義とその言語文化的考察 |
| 論文審査委員 | 主 査　教 授　新 谷 俊 裕 |
| | 副 査　教 授　清 水 育 男 |
| | 副 査　教 授　田 邉　欧 |
| | 副 査　筑波大学　伊 藤　眞 |
| | 副 査　広島大学　植 田 康 成 |

# 論文の内容要旨

イディオムや慣用表現と呼ばれるものは，言語学研究の中で，しばしば様々な規則から逸脱する「例外」として取り扱われがちである．しかし，実際の言語使用においてはイディオムの使用は決して例外とは言えず，多かれ少なかれ日常生活に存在している．どちらかというと書き言葉より話し言葉として多く使用されている感もある．いらぬ誤解を避けようとする公的文書にはイディオムは少ないかもしれないが，小説においてはそれなりの使用例を見ることができる．また，新聞記事においてもイディオムをもじった表現などもよく見かける．

外国語に接する際，イディオムは，外国人にとって意味理解にあたり混乱をもたらすことがある．各単語の意味を知っていても，それらが組み合わさったときに想像もつかないような意味を帯びるからである．しかし，単語はあくまでも文の構成要素でしかない．ひとつの単語が常に何かしらの意味を示すわけではなく，複数の単語が集まってひとつの意味を表す場合もある．イディオムもそのひとつである．そして，その意味は字面だけから推し量れるものではなく，イディオムの生まれた背景，イディオムの構成要素，主に名詞の担うその土地におけるイメージなども関係している．

修士論文『動物名が含まれるデンマーク語の慣用表現について』では，動物名が含まれる慣用表現 106 個について，その起源や近隣諸語に見られる同様の表現をもとに，デンマーク語の表現における特徴を具体的に考察した．また，既存の辞典に記載されているこれら慣用表現について，デンマーク人に対するアンケート調査から実際の使用を調査した．

本論では，修士論文で確認されたイディオムの実際の使用状況，そしてイディオムのいわれなどの文化的背景をもとに，イディオムの定義やその特徴，デンマーク語に特異であるとも言われている強勢との関係，そして辞典におけるイディオム記載など，主に言語的な側面からイディオムを考察する．

まず第1章では，イディオムと関連する用語の定義を明確にする．イディオムを主対象とする研究分野はそれほど長い歴史を持っていない．特にデンマークではその歴史が浅いと言える．そのため，方法論のみならず，術語の定義も発展途上である．fraseologi（慣用語法論）とidiomatik（イディオム論）は，ドイツにおいては同義に捉える傾向が見られる．しかし，デンマークでは，慣用語法論は慣用的に使用される表現全般を対象とする学問分野であり，イディオム論は慣用語法論の下位区分であると捉えられている．慣用語法論において研究対象となるものは，イディオムのほか，コロケーションやことわざ，名言，対句，合成語などが挙げられる．

イディオムとは「複数の語彙素から構成される表現であり，意味的に変形が起こっており，全体として語彙化されている」表現であると筆者は定義する．ただし，具体的な事象を意味する固有名詞や専門用語は含まれない．意味的な変形とはすなわち，イディオムの構成要素が通常の使用と異なる意味を持つことであり，そのために個々の構成要素の持つ意味の総計と，イディオムとしての意味との間に関連性が見られないことを意味する．例えば，have skudt papegøjen は，文字通りには［オウムを撃った］であるが，イディオムとしては，〈非常に幸運である〉ということを意味しており，個々の構成要素の持つ意味の総計とはかけ離れている．ただし，どの程度の変形が起こっているのか，その程度には差が見られ，en hvid løgn［白い嘘］〈必要な嘘〉のように一部にのみ意味の変形が起こっているものもある．そして，語彙化とは，形の上では複数の単語の結合であっても，全体としてひとつの意味を表しており，つまりひとつの語彙項目としての資格を持っていることを意味している．ただし，語彙化においてもその程度に差は見られ，発話の際に少なからず統語論的な変更が加えられたり，ヴァリエーションが見られるものもある．

第2章では，イディオムにおける特徴を，実際のデータをもとに検証する．イディオムに普遍的な特徴とされている語彙性に関して，構成要素の統語論的結びつきの異なるデンマーク語イディオムに6種類の文法テスト（分裂文，置換，省略，代置，指示語による分離，疑問詞疑問文による位置確認）を行い，特徴の有無を確認する．基本的には表現全体を代動詞などで置き換えることしか許容されず，イディオムを構成する要素を分けることはできなかった．しかし，イディオムによっては，例えば sidde med aben［猿と座っている］〈問題を抱えている〉のように，全ての文法テストが許容されるわけではないが，代名詞による置換について可能という回答もあった．核となる名詞 (aben) にイディオム全体の意味が集約され，単語として語彙化され新しい意味を担いつつある．このような場合には，イディオムの固定性も弱くなり，様々なヴァリエーション få aben〈問題の責任を担う〉，give aben videre til nogen〈～に問題を渡す〉などを可能とする．

第3章では，デンマーク語イディオムに特異な特徴ではないかと言われることがあるイディ

オムとユニット強勢の関係を取りあげる．ユニット強勢とは，複数の語彙素や単語から成るひとつのまとまりに強勢がひとつのみおかれるという特徴である．イディオムはひとつのまとまりとして捉えられていることからユニット強勢となる傾向にある，という一般論が果たして本当に正しいのかどうかを検証する．動物名が含まれるイディオム約 150 個について，8 人のデンマーク人の発音を録音し，強勢の有無を確認する．しかし，イディオムは基本的にユニット強勢となるが例外も見られる，と述べるには例外の数が多く，必ずしもイディオムはユニット強勢となるという原則が当てはまらないことが分かった．今回の検証は数的に限られており，また動物名という名詞が比喩性と関係していることも考えられるが，イディオムに限らず，一般的な強勢の規則がイディオムにも当てはまり，ただし例外も存在しているという捉え方の方が適当であり，イディオムという理由だけではユニット強勢となるとは言えないことが明確になった．今後の課題としては，ユニット強勢以外の語用論的分析が必要なのではないかと考える．

さて，イディオムだけではないが，外国語を理解するにあたり，その大きな助けとなるものが辞典である．しかし，デンマーク語に関しては，まだ日本語への辞典そのものが充実していないのが現状である．デンマーク語のイディオムを日本人学習者が理解するにあたっては，英語やドイツ語といった他の言語の辞典を介して日本語の訳を参考にするか，デンマーク語一言語辞典から意味を理解するしかない．第 4 章では，イディオムと辞典の関係を探るにあたり，まずは，現在デンマークで出版されているイディオム辞典 4 冊及びインターネット上のイディオム辞典，そして 3 種類のデンマーク語一言語辞典，デンマーク語－英語，デンマーク語－ドイツ語二言語辞典において，イディオムがどのように記載されているのかを考察する．

これらの考察をもとに第 5 章では，まず，二言語辞典におけるイディオム記載に関する一般的な問題点をまとめる．イディオムにおいては「偽の友達」など，似ている表現の存在により，意味にずれや偏りが生じていることに，使用者が気づかないことも考えられる．例えば，bide i græsset［芝を噛む］というイディオムは〈試合に負ける，敗北を喫する〉という意味であるが，辞典に記載されている対応するドイツ語のイディオム ins Gras beißen［芝を噛む］は〈死ぬ，くたばる〉という意味である．他言語辞典を参考にしつつも，原語であるデンマーク語で説明されたイディオムの意味記述を確認することが重要であると考える．しかし，母語話者のために作成された辞典におけるイディオム記載は，外国人にとっては必ずしも使い勝手がよいとは言えない．母語話者であれば感覚で使い分けのできる情報が割愛されていることがあるからである．例えば，動詞の時制や相などの統語論的な制限，どのような結びつきをとるのかといった外的結合価，そしてどういった場面で使用されるのかといった用法など，語用論的な情報を得るのは難しい．このことは，『デンマーク語慣用表現小辞典』編纂によって見えてきた問題点とも関連する．主に，見出しのイディオムの決定，また意味定義における問題点を具体例と共に示す．また，辞典使用者からの視点として，デンマーク人辞書学者が行った辞典の引

き方のアンケートを参考に，日本人に対しても，イディオムを始めとする複数語表現においてどの単語から辞典を引くのかを調査した．

そして，第6章においては，デンマーク語イディオムの特徴，またイディオムに関して辞典記述に求められるものをもとに，日本人を対象とするデンマーク語イディオム辞典，そしてデンマーク語－日本語辞典におけるイディオム記載の注意点をまとめる．イディオム辞典に関しては，動物名が含まれるイディオムに関して，実際の記載例を挙げることで今後の方向性を示している．

前述のように，現状では本格的なデンマーク語－日本語辞典は存在していない．また，日本人デンマーク語学習者も決して多いとは言えない．紙面による辞典が編纂・発刊されたところで，なかなか改訂を行えないのが現実ではないだろうか．紙面による辞典と同時に，常にアップデートを行える電子メディアを媒体とする辞典も，今後は視野に入れていくべきであろう．

日本におけるデンマーク語イディオム研究は始まったばかりであるが，デンマークにおいてもイディオム研究の歴史はまだ浅い．イディオムに関して，母語話者が「言語感覚」に基づいて運用している部分は，デンマークにおいても未だ明確にされていないと言える．しかし，既存の辞典やコーパスなどのデータベースを参照するだけでは，イディオムに関する情報を十分に収集することには限界がある．日本人学習者に対してより良いデンマーク語のイディオム辞典を提供すること，つまりイディオムに関する情報を明確にしていくことは，デンマーク語におけるイディオム研究を推進させることにつながるのではないかと思われる．

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、イディオム論 (idiomatik) 的考察と辞書学 (leksikografi) 的考察の２つの側面を有している。イディオム論的考察としてはまず慣用語法論 (fraseologi) も含めて先行研究を再検討し、そのうえでイディオムを筆者なりに定義し直し、主に動物名を含むデンマーク語のイディオムを用いて、デンマーク語のイディオムの特徴、特にイディオムとユニット強勢との関係の検討を試みている。辞書学的考察としては、デンマーク語－デンマーク語辞典、デンマーク語－英語辞典、デンマーク語－ドイツ語辞典におけるイディオムの扱い方や、1990年代になってようやく出版された３冊のデンマーク語イディオム辞典におけるイディオムの記載方法を批判的に検討し、今後編纂が期待されるデンマーク語－日本語辞典におけるイディオムの記載方法や、日本語によるデンマーク語イディオム辞典の編纂方法について提言を試みている。

本論文は、全６章から構成されている。

第１章では、しばしば混同される慣用語法論 (fraseologi) とイディオム論 (idiomatik) の明確な区別を主張し、それぞれの定義を試みている。ドイツ語の当該分野に関して比較的長い研究の歴史を有するドイツ語圏では、Phraseologie と Idiomatik は同義と見なされる傾向がある。他方、1990年代になってようやく本格的に

研究が始まったデンマークにおいては、idiomatik は fraseologi の下位区分であると捉えられる傾向がある。筆者も後者の立場をとり、Toftgaard Andersen や Farø の定義を参考にしつつ、イディオムとは、「複数の語彙素から構成される表現であり，意味的に変形が起こっており，全体として語彙化されている．ただし，具体的な事象を意味する固有名詞や専門用語はイディオムに含まれない」と定義する。

第２章では、イディオムの特徴である語彙性に関して、これまでに提案されてきている６種類の文法テスト（分裂文、置換、省略、代置、指示語による分離、疑問詞疑問文による位置確認）が、デンマーク語のイディオムにおいても有効であることを確認している。

第３章では、イディオムはひとつの意味のまとまりとして捉えられ、デンマーク語においてはユニット強勢となる傾向にある、という一般論の有効性を検証した結果、必ずしもイディオムはユニット強勢になるとは限らないと結論付けている。

第４章では各種辞典におけるイディオムの記載方法を検討し、続いて第５章では辞典におけるイディオムの記載上の問題点を指摘している。例えば、デンマーク語の gift〈毒；結婚している〉と英語の gift〈プレゼント〉やデンマーク語 rolig〈静かな〉とスウェーデン語 rolig〈楽しい〉のように、２言語間の単語に見られる“偽の友だち”(falske venner, false friends, falsche Freunde, faux amis) に注意を喚起している。

最後に第６章では、日本人を対象とするイディオム辞典、デンマーク語－日本語辞典におけるイディオム記載の注意点をまとめ、動物名が含まれるイディオムに関する記載の具体的提案を行っている。

本論文の審査において評価された点：

(1) デンマーク語に関するイディオム論や慣用語法論は研究の歴史が浅く、デンマークにおいても 1990 年代に３冊のイディオム辞典が刊行されたことをきっかけに研究が始まったばかりである。日本においては、デンマーク語の慣用表現を扱った筆者、鈴木氏の修士論文と諸論文を除けば、本論文が最初の試みと言える。その点において、本論文は,日本におけるデンマーク語、ひいては他の北欧語のイディオム論研究のパイオニア的存在であると評価できる。

(2) また、本論文のデータにも用いられているが、数回にわたりデンマークに赴き行なった調査、メール等を利用して行なった調査自体も評価の対象となり得よう。

(3) 第３章でイディオムとユニット強勢の関係を検討しているが、デンマーク語の強勢に関する Hansen & Lund や Scheuer の難解な論証を読みこなし、録音したデータを忍耐強く分析した結果、一般によく主張されるイディオムとユニット強勢との関係が誤りであることを指摘した点は大いに評価できる。

(4) 第６章において、８つのイディオムを例としてとりあげ、挿絵やイディオムの起源等に関するコメントを交えて、日本におけるデンマーク語イディオム辞典の記載例を示した点は、将来期待されるイディオム辞典編纂のモデルになり得るものとして、全審査委員、とりわけイディオム論を専門にしている２名の審査委員から大いに評価された。

本論文の審査において指摘された問題点：

(1) 論述中の日本語表現に関してはもう少し明晰化を図るべきであるという指摘が１審査委員からなされた。またいくつかのイディオムの日本語訳に関しても、より練った方が良いという指摘が複数の審査委員からなされた。

(2) 第１章において、筆者はイディオムの定義の再検討を試みているが、内容としてはそれほど新しいものになっていないのではないか、という指摘がなされた。それよりも、ドイツ語のイディオム論では、イディオムの特徴のひとつとしてイディオム性 (Idiomatizität) を挙げるのに対して、筆者はイディオム性とはイディオムの特徴を全て含めた概念としているが、そこからさらに一歩踏み込んで、筆者の言うイディオム性の度合いに従ってイディオムの分類を試みるべきであった、という指摘がイディオムを専門とする２審査委員からなされた。

(3) 第３章においてデンマーク語の強勢に関する Hansen & Lund や Scheuer の諸説に関して、説明不足の箇所が見受けられ、論証の理解を妨げている、という指摘があった。

(4) そして、最後に、本論文のタイトルにある「言語文化的考察」が十分に展開されているとは言えない。タイトル提出後に研究の方向性が大きく変わってしまったことに原因があるが、この点は審査においてマイナス点とみなされた。

以上、本論文の評価できる点と問題点を考慮しつつ、審査委員会では慎重に議論した結果、タイトルに関する問題点やその他大小の欠点も散見されるものの、今後日本におけるデンマーク語、ひいてはその他の北欧語のイディオム論を開拓していくモデルになるものとして大いに期待できる点の方が大である、という判断がなされ、審査委員全員一致で合格に値するものである、という結論に達した。